

ワカサギ (キュウリウオ科)

学名 : *Hypomesus nipponensis*

別名 : 公魚, チカ, アマサギ

大きさ : 全長 14 cm

特徴 : 体形は細長く、腹びれの基底は背びれ起点よりも前にある。体色は背面がやや黄色味をおびた暗色で、側面は銀色。産卵が近づき成熟が進んだオスの体色は光沢のある銀黒色に変わる。メスはオスのようには黒くならないが、卵巣の発達にともない腹部が太くなる。また、鰓蓋における色素胞の発達が雌雄で異なり、オスでは鰓蓋全体に広がる（写真 1）。類似種にチカ（*H. japonicus*）がいるが、チカの腹びれ基底は背びれ起点の直下より後方にあることなどで本種と識別できる。霞ヶ浦や涸沼に生息しているのはワカサギである。

国内の分布 : 東京都・島根県以北の本州や北海道の河川下流域や沿岸域。このほか全国各地の湖沼やダム湖に移殖されて分布

県内の分布 : 霞ヶ浦水系, 利根川水系, 涸沼や那珂川, 水沼ダムなど

県内での生態 : 霞ヶ浦・北浦での生態を紹介する。両湖におけるワカサギは基本的に



写真 1 : 成熟の進んだワカサギの頭部。鰓蓋の色素胞に注目。

は 1 年で生涯を終える年魚である。産卵期は 1 月中旬～3 月中旬で、盛期は 2 月。産卵場所は水深 1 m 前後の湖岸に近い浅所や流入河川の砂底あるいは砂礫底である。産卵は主に夜間に行われる。1 個体あたりの産卵数は 2,000～20,000 粒で、体重 1 g あたり約 1000 粒の卵をもつ。生み出された卵は卵膜上の粘着膜が反転して砂粒などに付着する（写真 2）。卵は、水温 7℃ の場合、約 38 日でふ化する。ふ化仔魚は 3～4 月にみられ、ワムシやカイアシ類の幼生などの動物プランクトンを食べて成長する。例年であれば 5 月には体長約 3 cm、7 月初旬には約 6 cm（写真 3）、12 月には約 10 cm になる。5 月以降のワカサギはイサザアミや動

物プランクトンを食べており、8月以降はそれらに加えてハゼ科魚類仔魚やユスリカの蛹なども食べるようになる。

備考：霞ヶ浦と北浦は全国屈指のワカサギ産地である。主な漁法は、漁船による曳き網（トロール、写真4上）や湖岸付近に網を設置する張り網（写真4下）である。1999～2004年にかけては漁獲量が約100トン以下にまで減少したが、その期間を除けば150トン以上が漁獲されている。ごく最近の2009年には、国内漁獲量2,043トンのうちの22.3%、455トンが漁獲されており、全国のワカサギ漁業における両湖の重要性がうかがえる。このワカサギに関して霞ヶ浦と北浦の漁業者は、資源の安定化を図



写真2：ワカサギの卵（中央）。附着膜が見える。周囲の卵はシラオオの卵。いずれの卵も食紅で染色されているため色が赤い。



写真3：7月のトロール漁解禁の頃のワカサギ。

るため2006年に「ワカサギ資源回復計画」を策定している。これは、資源水準がある値よりも低下した場合、漁獲を抑制する取り組みの検討を始めることを決めたものである。2008年と2009年には作業時間の短縮による漁獲抑制が実際に北浦で行われたが、資源回復に必要な産卵親魚の確保に貢献したことが漁獲抑制後の資源水準の推移に基づいて評価されている。今後の資源の保全と漁業の両立が期待される。

その一方でワカサギは、全国各地における遊漁や観光などへの貢献度も高いといつて過言ではない。ただそれは、主に卵の移殖放流によって達成されたものである。

ワカサギ卵の移殖放流の歴史は古く、1909年（明治42年）に茨城県涸沼のワカサギで人工採卵を行い、福島県松川浦に移



写真4：トロール漁業（上）と張り網漁業。

殖したのが国内初と記録されている。霞ヶ浦からの移殖は 1913 年（大正 2 年）に始まり、そのときは松川浦に移殖されている。そしてその翌年、松川浦や滋賀県琵琶湖に移殖され、その後はさらに長野県諏訪湖など、全国各地に卵が供給された。しかし、霞ヶ浦のワカサギ資源が減少した 1958 年以降は行われていない。現在は霞ヶ浦や北浦、涸沼、牛久沼、桜川などにおいて、資源増殖のための人工採卵、ふ化放流が漁業者らによって行われている（写真 5）。

ワカサギは茨城県の内水面の重要な魚であり、“茨城県の淡水のさかな”にも選定されている。2001 年に霞ヶ浦町（当時）で開催された“わかさぎサミット”では湖に対する多様な価値観の認識と、人と湖との共生を願い、協力と活動の継続を訴えた“2001 霞ヶ浦わかさぎ宣言”が宣言されている。これからもワカサギ資源を保全しつつ、大いに利用したいものである。

主な文献：

日暮 忠（1916）ワカサギ（公魚）の人工孵化と其移殖。水産研究誌, 11(3): 159-162.

橋谷尚志（1958）霞ヶ浦におけるワカサギの漁業生物学的研究Ⅳ 食性について。茨城県水産振興所調査研究報告, 3: 17-24.

茨城県（1996）県のさかなの制定について。茨城の水産, 茨城県。pp. 40-41.

茨城県（2002）「わかさぎサミット」「ワカサギに学ぶ会」が開催されました。茨城の水産, pp. 51-52.

茨城県公魚養殖誌（出版年不詳。ただし大正年代に書かれたと言われている）。57 pp.

加瀬林成夫・中野 勇（1961）霞ヶ浦におけるワカサギの漁業生物学的研究Ⅵ。茨城内水試調査研究報告, 6: 1-64.



写真 5：霞ヶ浦での人工採卵の様子。ボールに受精卵が入っており、鳥の羽でシュロにつけていく。

熊丸敦郎（1984）ワカサギの人工ふ化管理方法について。茨城内水試調査研究報告, 21: 11-30.

根本隆夫・河崎 正・位田俊臣（2003）試験用人工河川におけるワカサギ親魚の遡上時間。茨城内水試調査研究報告, 38: 19-23.

根本 孝（1994）霞ヶ浦北浦ワカサギ・シラウオ仔稚魚分布調査。茨城内水試調査研究報告, 30: 127-133.

鈴木健二・位田俊臣（1977）霞ヶ浦における漁業資源の生産構造に関する研究－Ⅰ。茨城内水試調査研究報告, 14: 1-10.

高橋 惇・位田俊臣・中村 誠・鈴木健二（1980）北浦におけるワカサギ産卵場の堆積物の粒度特性について。ミチューリン生物学研究, 16(1,2): 91-107.

富永 敦・野内孝則（2006）霞ヶ浦の流入河川におけるワカサギの産卵。茨城内水試調査研究報告, 40: 23-27.

富永 敦（2009）北浦潮来地先における 1980 年頃と 2007 年のワカサギとシラウオ産卵状況の比較。茨城内水試研究報告, 42: 15-19.

野内孝則（2006）霞ヶ浦北浦におけるワカサギ及びシラウオ仔魚の出現について。茨城内水試調査研究報告, 40: 29-36.